

近くて遠いムーミン谷

平成 18 年 7 月 15 日

講師：富原 眞弓

今日は福井先生が北欧全体のことをお話し下さるとのことなので、私は最初の予定をちょっと変えまして、トーベ・ヤンソンのこと、絵本についての読み解き、こちらの方を中心に話します。

I 北欧とトーベ・ヤンソン

(スクリーンの写真を見て) さっそく写真が出ましたので、写真からいきます。1989 年ですので 17 年前になりますが、初めてスウェーデンに行った時の写真です。この時に右の下の方にいます、このグニラという人とは、彼女が日本に来た時に会いました。これが 1988 年です。(私は) この時に、初めて北欧というものにじかに触れ、その北欧の人たちを生で見て話をして、北欧っておもしろいところだなと思いました。こちらにいるのはグニラのお母さんです。

次の年にストックホルムに行き、初めてちゃんとヤンソンを知りました。すごく遅くヤンソンに出会い、また、北欧に出会ったものですから、子どもの時にヤンソンの物語を読んだとか、テレビのアニメを見たとかという経験が全くなくて読んでしまったので、すごく偏った見方をしているかもしれません。幸いにしてストックホルム、あるいはヘルシンキでいろんな友人に恵まれて、そのおかげで、どんどんヤンソンの世界に入り込んでいくのですが、そのきっかけの一人がこの右の方になります。この人はクリスティーナ・ビョルクという人で、日本でもわりあい有名になりました『リネア、モネの庭で』(1985 年)という絵本の作家です。スウェーデンのレーナ・アンデションという画家が描いたリネアという少女が主人公で、クリスティーナ・ビョルクがテキストを書いています。たぶんご覧になった方がいらっしゃると思いますが、クリスティーナ・ビョルクもヤンソンの本を読んで、自分も作家になろうと思った人で、この人とはヤンソンの 80 歳の誕生日を祝うタンペレでの国際大会の時に会いました。それ以降なんとなく付き合いが続いています。その付き合いの関係で、1 冊だけクリスティーナ・ビョルクの作品の翻訳をしました。

それが、テディベアが主人公になった、『テディベアの書いた本』(1988 年)です。これは今や絶版なのであまりお目にかかることはないと思います。テディベアマニアの中に密かなファンがいるみたいです。この人自身が子どもの頃から大事にしているテディベアたちを主人公にした物語です。写真絵本です。(私の) 翻訳というのは非常に分野が限られていて、シモーヌ・ヴェイユかトーベ・ヤンソンの翻訳しかしていないのですが、唯一の例外

がクリスティーナ・ビョルクのこの翻訳なのです。

(写真を見て) 先ほどの写真は、ある島に行った時の写真です。その島には、ヤンソンが子どもの頃に母方のおじいさんとおばあさんの別荘がありまして、そこによく行っていたそうです。それがこの別荘です。少しぼやけていますが、赤い別荘です。たとえば、『彫刻家の娘』(1968年)などに出てまいりますので、ちょっと見ていただきます。『彫刻家の娘』に「金の子牛」という章がありまして、パラダイスの谷とされているものがあります。——わたしの母方の祖父は牧師で、王さまに説教をしていた。子や孫や曾孫がこの地にみちるまえ、祖父は森と岩山にかこまれた細長い緑の野にやってきた。パラダイスの谷を思わせるその野原は、子孫が水あびできそうな入り江とひらけている。(中略) 祖父と祖母がたてた大きな家には、中折れのある屋根、たくさんの部屋と階段とテラス、大きなベランダがあり、家の中や外のいたるところに、白木の家具がおいてある。——

この家のことを書いていると思われます。初めてこの家を見た時、ものすごく赤いことにびっくりしました。白い枠で囲ってある。もちろん赤い壁に木の枠というのは北欧の建築の一つのスタイルなのですが、なんとなくムーミン谷の中にある、ムーミン屋敷の原型というイメージとは違ったなあという感じはありました。(写真を見て) この前の階段に座っているのは私です。もう少し遠くから見るとこんな感じになります。これがパラダイスの原っぱということで、さらに引きますと次のようになります。ですからずっと何も無い原っぱが開けていてずっとこのまま行くと、海辺に出ます。本当に何にもないところにぼつんと家があるという感じでした。

先ほどのクリスティーナ・ビョルクの別荘がたまたま同じ島にあつて、たまたまこの家を発見して、私に連絡をしてくれて、ムーミン屋敷を発見したから一緒に探訪に行きましようと言われたので、喜んで行ったわけです。

ムーミン谷というのはどこにあるのか。もちろんこれは架空の場所ですから、場所探しをするというのはただの愛嬌ということで考えていただきたいのですけれども、ヤンソン自身はこういうふうに言っています(1994年)。

——ムーミン谷は、スウェーデンの祖父が住むしあわせな谷と、フィンランドの島々と一緒にあって——それもうまいぐあいに混ざりあって——できあがったものです。——

両方の要素を持っていますが、もちろんそのどれでもない、頭の中から生まれ出た場所ではあります。フィンランドのペッリング地方というところがあるのですけれども、だいぶ離れたところにヤンソンが島を借りて、小屋を建てて25年近く住むことになります。(写真を見て) そこに向かうボートの中が寒く、私は帽子もマフラーもなかったもので、これはみんな借り物です。ほとんど凍えかけています。ヤンソンの島のすぐ近くまでは船で行ったのですけれども、9月になると波が荒いので上陸できませんでした。上陸はまたの機会にということで楽しみにしています。

大人の読者を対象とした『島暮らしの記録』(1996年)という話があります。その中に、比較的現実に近いのだろうかと思わせるような描写があります。ヘルシンキから全長が8

メートルくらいのモーターボートで行ったのですが、それでも近くの大きな島まで行くのに 2 時間半くらいかかって、近くの大きな島から先ほどの小さなモーターボートに乗り換えて、ヤンソン島を目指したのですけれども、そのペッリング地方の地図の中に、クンメル岩礁（シェール）があります。ちょうど首飾りのようになっていて、真ん中にある 1 番大きな珠のような島がクンメルシェールであると。クンメルシェールよりもさらに外界に出て行くと「ふたつに割れた万力島」と書いてあります。万力（まんりき）というのはご存知の方もいらっしゃると思いますが、締め付ける道具のことです。万力のような形をしているのでクルーヴ、そして島はハルなのでクルーヴハルと言われています。面積が 6,000 から 7,000 平方メートルの島で、ぐるっと回るのにそんなに時間はかからない、7、8 分と言われています。その島にヤンソンは移り住みました。ですので、ムーミン谷というのは、私がいつも思うのは、ある種の陸の孤島なのです。一方に海があつて、もう一方にはおさびし山と言われている険しい山があつて、ムーミンたちが外界と接触するためには、水の道しかなくて、つまり、海を通ってニョロニョロの島へ行くか、川を行って天文台に行くとか、陸の道というのがあんまりはつきり出てこない。私の勝手な解釈ですけれども、ムーミン谷は島なのだ。この島は、ストックホルムの近郊の島と、ヘルシンキの近くの島、この二つが混ざった島なんじゃないだろうかと思ひます。

II トーベ・ヤンソン

II-i ヤンソンの家族像

ヤンソンのこと、あるいは、ムーミン谷を中心とする物語について少しご説明しようと思ひます。ではヤンソン自身が家族を描いた油絵がありますのでご覧いただきます。（油絵を見ながら）これは真ん中にヤンソンがいます。ヤンソンのこちらの左側がお母さんです。シグネという名前ですが、通称ハムといわれているお母さん。画家でもあり、切手や図案も描いていた。右手 1 番右側にいるのがお父さんの彫刻家ヴィクトル。ファッフアンと呼ばれている。そして、下に 2 人、男の人がいますが、右の方にいるのがペル・ウーロフといつて、すぐ下の弟さん。チェスの盤に肘をついているのが 1 番下の弟さんのラルスです。3 人兄弟でヤンソンは 1 番年上です。ちょっとわかりにくいかと思ひますが、ペル・ウーロフは軍服を着ています。つまりこの絵が描かれたのは 1942 年。戦争の真っ最中です。第二次世界大戦がまだ終わっていません。ペル・ウーロフは出征していつて、ちょっと帰つてきているという状況です。なんとなくあんまり色合いが明るくなくて暗い雰囲気です。トーベ・ヤンソンは、何か怒つたような顔をしていますし、黒い喪服のような服を着ています。後にヤンソン自身は、（現実からの逃避として）この時代にムーミンロールの物語を書くようになったと言いつています。そんな重苦しい時代が表れているかと思ひます。

ヤンソンは皆さんもご存知のように、もともとは画家としての教育を受けた人で、お父さんは彫刻家、お母さんは画家ということで、当然のように自分も芸術家になるのだと思つて、15 歳で学校をやめます。学校の勉強は自分に合わないので、好きなことをやりたい、

絵を勉強しに行きたいと言ったら、こういう時にお母さんは偉かったのですが、反対しなかった。ですから、15歳でいわゆる普通の勉強はやめてしまいます。さっそくストックホルム、イタリア、フランスと、絵の修行に出かけます。(写真を見て)これはヤンソンがアトリエで絵を描いている様子なのですが、真ん中にヤンソンがいます。その真ん中のヤンソンからちょうど上に上がると、お父さんの作った彫刻があります。左の方は、少しわかりにくいですが窓が二つ見えます。それから右の方にベッドの天蓋がありまして、これは『ムーミン谷の仲間たち』(1962年)に「スニフとセドリックのこと」という短編があるのですが、その中にスヌスムリク(スナフキン)の、お金持ちのおばさんが寝ているベッドの上に天蓋がついていて、その天蓋だけ残っています。こういうところで絵を描いていたということです。

ヤンソンが、おそらくいろんな意味で最大の影響を受けた人は、お母さんだろうと私は思っています。このお母さんと2人で写真に写っていて、2人とも眼鏡をかけていて、私はすごく好きなのですが、あえてこの写真を選んだのは、後ほどお話しする絵本の主人公がやはり眼鏡をかけていて、ヤンソンが眼鏡をかけている写真はあんまりないのです。これを見ると絵本の主人公の女の子にも自分自身を投影しているのだらうなと思います。奥の方がお母さんで、80歳過ぎても現役で絵を描いていたという、とても立派な人で、まずお父さんの稼ぎだけで一家は食べていけませんので、一家の稼ぎをするのもお母さん、子どもや夫の世話をするのもお母さん。それだけでなく、自分の芸術的な才能を開花させたという、ものすごいスーパーお母さんだったのです。そのお母さんをやはりヤンソンはものすごく尊敬していたし、このお母さんだからこそ、ある意味で非常に母離れ、子離れがお互いにくかったというところがあったのじゃないかなと思います。これは今日これからお話しするテーマとも関係がありますのでお話ししました。

次は絵を描いているヤンソンの姿です。いわゆるスモッグを着ています。たぶんヤンソンは自分のことをやはり生涯画家だと思っていたらしい。もちろん小説を書いた作家でもあるのですが、最初のアイデンティティの形成というのはアーティストと言っていて、ヤンソンがアーティストというときは画家ということを表していたように思います。

II—ii ムーミン谷の地理と地図——6枚の地図から

ムーミン谷の地理と地図を、今から6枚お見せします。ムーミンの物語は9冊ありますがけれども、9冊のうち、6枚の地図が出てきます。(スクリーンを見て)これが、1番最初のムーミン物語の第1作『小さなトロールと大きな洪水』で、1945年に第二次世界大戦が終わってすぐに出た本の最後の部分なのですが、真ん中にムーミン屋敷がありまして、このムーミン屋敷が大洪水で流れて、流れ着いたところが今まで見た中で1番美しい谷で、ストックホルムとヘルシンキの島の特徴を併せ持ったムーミン谷だったのではないかと思います。これは地図というよりは絵なのですけれども、すでに川が出てきていますし、おさびし山と思われる、険しい切り立った山が出てきます。ただ、おもしろいのは、この時

点では海がまだ出てきていません。海が出てくるのは第2作の『ムーミン谷の彗星』(1946年)で初めて、スニフが海を発見するという話がありますので、最初のうちすぐそばに海があることを知らないで住んでいたという設定になっています。

次は、これは第3作になりますが、『たのしいムーミン一家』(1948年)からの地図です。『たのしいムーミン一家』の地図の特徴は、ムーミン屋敷の見取り図が書いてあることです。他の地図にはムーミン屋敷の見取り図は書いてなくて、その後どうも現実と合わないこともあるので、これはその時のたまたまそういう割り振りになっているという程度だと思います。ここですでに海がしっかり描かれています。ですから左の上の方には海があって、さらにその上にニョロニョロの島がありまして、おさびし山が右の真ん中あたりにありまして、くねくねと川が流れています。なんとなくムーミン谷はちゃんと書かれているけれども、海と川のほかはちゃんと描かれてないという感じはします。

次は『ムーミン谷の夏まつり』(1954年)という作品の中での地図です。これはムーミン谷ではなくて、ムーミン谷の近いところにあるとは思われますが、もみの木湾という名前がついていて、ここに劇場ごと流れ着いたムーミンたちがお芝居をするという話です。この話、この地図ではムーミン谷の位置はわかりません。

これは『ムーミン谷の冬』(1957年)ということで、ムーミン谷の夏と冬をだいたい比べてみますと、比較的対称的に書かれている地図は、ムーミン谷の夏とムーミン谷の冬の地図です。これ以外は縮図が違っていたり、ムーミン谷ではないものが描かれていたりしますので、これはちょうどムーミン谷の夏の地図を雪景色にするとこんなふうになるのだなという感じがします。おもしろいのは、ムーミン屋敷がとがった塔みたいな形になっているのですが、雪が降ると、なぜか丸い形になっていて、たぶん物理学的には丸くなるはずがないので、ちょっと変な感じがします。ですから、おそらく象徴的にムーミン屋敷は丸くなっている。丸くなったらどう見えるかという、なんとなくムーミンに見えるということなのじゃないかと思っています。

それから、この絵ではっきりわかるのは橋です。橋というのが『ムーミン谷の冬』の頃から重要な役割を果たすようになります。『ムーミン谷の十一月』(1970年)になりますと、橋を渡ってヘムルやフィリフヨンカがやってくる。つまり、ムーミン谷がある種開かれてくる象徴のような気がします。それまでは完全に島だったのですが、橋が非常に強調されて描かれているかなという感じがしました。

次は物語としては最後なのですが、『ムーミン谷の十一月』ではご覧のように、だいぶ周りの様子が描かれてきます。ムーミン谷の隣に、フィリフヨンカの谷があります。ここからは、砂漠だけになりますというふうに描いてあって、だんだん人がいなくなってしまう。橋の役割がクローズアップされたということとつながって、ムーミン谷がだんだん孤立ではなく、連帯といいますか、開かれた方向になってきているような気がします。

最後に『ムーミンパパ海へいく』(1965年)という作品に書かれている地図をお見せします。これは、灯台のある島にムーミン一家たちが引越していくという話です。この灯台の

ある島というのは、灯台を除いては、ヤンソンが長らく暮らしたクルーヴハルにそっくりだと言われています。この地図の非常におもしろいところは、ここにフィンスカビーケンと書いてあるのですけれども、フィンランド湾と書いてあります。つまりある意味で初めて、実在する名前が出てきました。ですからムーミン谷がどこにあるのかというのは、実はこの地図を見るまではっきりしなかった。ただ、これも実は抜け道があって、パパが行った島はフィンランド湾にあるのだけれども、ムーミン谷がフィンランド湾にあるかどうかはわからないというふうに逃げることはできます。パパがボートに乗って、家族を連れて行ける場所なので、そんなに遠いところじゃないだろうということぐらいしかわかりません。あくまでムーミン谷がどこにあるかということはわからないままにしておこうという配慮なのかもしれません。

ここで、なぜ6枚の地図をお見せしたかということ、最初に言いましたように、ムーミン谷が陸の孤島であったということから、徐々に開かれていくんじゃないかということにつながったのです。これは、福井先生が詳しくおっしゃってくださると思うのですけれども、ヤンソン自身がフィンランドという国の中でも、スウェーデン語系という少数のグループに属していた。ヤンソンはあるインタビューで、ムーミンの家族はスウェーデン語系のフィンランド人を象徴しているのか、という質問に答えて、

——ええ、そうですね。わたしが描いたのはスウェーデン語系フィンランドの家族ですから、どんな少数民族にもつきものの孤立感があるかもしれません。でも、まったく悲壮感（ペイソス）なしに描きました。一家は互いに満足していて、周囲にも、生きている場所にも満足しています。とはいえ、それとわかるスウェーデン語系フィンランド的な特徴を備えています。それ自体がよいとか悪いとか言うのではなく、単にそうだとことです。——

と言っています。もちろんそうだ、しかし、かと言って特別情緒的に葛藤があるとかそういう意味ではない、と言っています。心理的、文化的意味でのある種の孤立のようなもの、孤立といっても悪い意味ではないのですが、ある一つの小さな共同体であったということはいえるかと思います。ムーミンの家族を中心とするムーミン谷というのは一つの見方です。もちろんそれだけで見ることは間違っていると思うし、危険だと思いますが、一つの見方としては言葉を中心とした一つの少数派のグループ、そういう中でもさらに芸術家たちの小集団ということで、ムーミンたちはやはり芸術家の小集団なのです。その芸術家小集団を取り巻く普通の人たちがヘムル、フィリフヨンカといった人たちで表されていると見ることはできるのではないかと思います。

では、次にちょっとこの絵を見ていただきますと、この絵は、1番最初の『小さなトロールと大きな洪水』の絵です。これでまず気がつくのが、ムーミンママとムーミントロールが真ん中に描かれていますけれども、あんまりかわいくない。鼻がとがっているし、ムーミンママはエプロンをしていないし、というような感じです。この絵では非常にムーミ

ンたちの小ささが強調されていると思います。

III ムーミン谷再訪、または危険な旅

今日のメインのテーマなのですけれども、ヤンソンの絵本を中心にちょっとお話をしたいなと思いました。絵本の話をする前に、レジユメの[「略年表／著作リスト」](#)（資料参照）という、ちょっと色のついているページを見ていただけますでしょうか。ちょっと微妙な色分けなのでわかりにくいかもしれません。赤字が小説、いわゆる児童文学と言われているもので、ムーミンの1から9ということでM1-M9と番号を振りました。青字は絵本です。ピクチャーブックという意味のPですが、P1-P3で3冊です。それから緑は連載漫画コミックスです。これは新聞の連載漫画『ムーミン』というものがあまして、今は日本もそうですが、フィンランドでもスウェーデンでも単行本が出ています。最後の紫の字で書かれたものは小説です。この中には、中学生くらいからのヤングアダルトを対象にしたものと、いわゆる一般の大人を対象にしたものがあります。これがノベラということでN1-N11。大きく分けて、四つの作家活動があると思います。その中で絵本のP3『ムーミン谷へのふしぎな旅』（1977年）を今日ちょっと取り上げようかなと思います。今までお話ししましたムーミン谷が一つの島であって、でも後期になってくると段々開かれてきている兆候が表れていること、ヤンソンがお母さんと非常に親しい関係にあって、それがどういうふう作家活動に影響を及ぼしているのかということ、この2点を少し頭において読んでみようかなと思います。

III-i 『ムーミン谷へのふしぎな旅』の構成

年代を見てみますと、P3『ムーミン谷へのふしぎな旅』というのは1977年に出ています。ムーミンの物語そのものは、1970年にすでに9冊目が出て完結しておりますので、ここで、ある意味ムーミンの世界は閉じられたと考えていいかと思います。この閉じられたあとにムーミンに関わるものとしては、演劇の世界では少し仕事をしておりますけれども、著書という形では絵本しかないです。つまり1977年の『ムーミン谷へのふしぎな旅』というのだけがムーミンに直接関わる作品とっていいかと思います。その意味で、もしかしたらムーミンの物語と、後の大人向けの小説との間の橋渡しの位置にあるのではないかというふうにちょっと考えました。

それでは実際に絵本をご覧くださいながら少しずつお話しします。表紙を見ていただきますと、*Den Farliga Resan* となっていて、*Farliga* というのはヤンソンの好きな言葉の一つで「危険な」という意味です。*Dangerous* という意味ですが、日本語の「危険な」というのはちょっとニュアンスが伝わらないような感じがします。つまり *Farliga* というのはヤンソンにとっては、わくわくすること、楽しい、ちょっと怖い、みたいな、とても混ざり合った感情を引き起こす刺激的な言葉で、たとえば、『ムーミン谷の夏まつり』の原題も「危険な夏まつり」ということになっています。今までの当たり前だと思っていた世界や、

当たり前だと思っていた常識が崩れ去ることの快感と怖さが混ざり合った感情を呼び起こすものが危険なものなのです。ですから危険な旅というのは、怪我をすとか、命が危ない目にあうとかそういう意味ではなくて、夏祭りがちょうど、上へ下への大騒ぎになって訳がわからない話になるのと同じような意味で、今までの当たり前だと思っていたことがひっくり返ってしまう、そういう危険な旅のことなのだと思います。

III-i 特殊性

もう 1 度前に戻ります。このスサンナは眼鏡をかけているので、先ほどあえてヤンソンが眼鏡をかけている写真をお見せしたのです。絵本の中でも、物語の中でも、たぶんどう見ても人間にしか見えないのですけれども、人間が主人公になっている、あるいは重要な役割で出てきているというものは他にありません。ムーミン谷は架空の生き物だけ、大人の作品では人間だけが出てきます。架空の生き物だけのムーミン谷と、人間しか出てこない大人の小説との橋渡しをする作品として読めるかなと思っています。ですからこの絵本の中では、普通の人間と、ムーミン谷の住人たちが、当たり前のように入り混じって出てきます。

この最初と最後は丸で囲まれた 1 ページですが、あとは見開きの 2 ページで出てきます。この絵本のもう一つの特徴を思い出しました。3 冊のうち最初の 1 冊と 2 冊では、本文がみんなヤンソンの手書きです。この 3 冊目の絵本のみが活字です。これはやはり絵本の子どもの世界と大人の世界を、入り組んだ感じで描いているのかなと思います。

スサンナは退屈な日常がつまらないと言っていて、この猫ものらくらして、頭に來る、もう猫なんて見たくないと言ったら、違う眼鏡が出てきて、それをかける。眼鏡を変えるということは、ものの見方を変えるという非常にわかりやすい比喻です。ものの見方を変えたら、違う世界が見えた。のらくらして寝てばかりいる年寄りの猫が突然どうもうな怪物のような顔で飛び上がったのです。

この絵を見ていて、なんかおもしろいなと思うのは、普通こんな怪物が出てきたらびっくりするのに、ずーっと、物語の間中スサンナは基本的に、非常にしらっとしているのです。子どもの物語の中の主人公というのは、喜怒哀楽をはっきり出すような描かれ方が多いんじゃないかなと思っていたら、すごくずっとしらっとしているのでおもしろいなと思って見えています。この絵の方では右の半分が静かな感じで、左の半分が動いた感じ、つまり 1 枚の見開きの絵でありながら、二つの世界があるという感じがします。こういう見開きでありながら、右と左とでイメージが違うという絵がたくさん出てきます。

スサンナは、途中でムーミン谷の住人の一行に出会います。ここで突然色合いが明るいというか暖色系の色合いになります。それまでは、赤いといっても紫がかった赤や、青とか黒とか茶色とか寒色系でした。へムルとインクとトフスランとピフスランと、ここも先ほど見ていただきましたように、こちらの右側のページと左側のページではずいぶん印象が違います。スサンナは全体として白っぽく、色が無い。色が無いということはおそらく

これからどんな色になるのかなという感じです。ところが、こちらはもう決まっています。このヘムルの一行はここらへんがおかしいのですけれども、『不思議の国のアリス』の手法を思い起こさせるわけですが、この話は誰の観点から書かれているかということです。スサンナの夢なのか、その夢の中にムーミン谷の住人たちが入り込んでいるのか、あるいは逆なのかという話があとで出てくると思います。ここで一行は、みんなで一緒にムーミン谷を目指そうとします。このヘムルたちはちょっと散歩に出ただけなのに迷ってしまいます。ちょっと散歩に出ただけなのに、こんなところで迷ってしまうところが不思議です。この人たちがムーミン谷に行こうとしている。この物語のスサンナは、最初からムーミン谷に行くという気は全くなかった。退屈な日常、つまらないこの猫も嫌だと思っていると、世の中が変になってきて、どうしようと思っていたら変な人たちに出会って、その人たちがムーミン谷に行こうというのでただついてきたという、非常に受け身な感じ。この女の子のイニシアティブはまだ全然現れていない。

そこへ、天変地異がどんどん出てきます。まず、ヤンソンの大好きな火山の噴火が出てきます。これは絵的には大好きできれいです。やはり、右側がとてもダイナミックに動いているのに対して、左側が妙に固まっている。本当はみんなが驚いたり、悲しんだり、喜んだりする出来事が起こっているのに、みんな無表情というのは、夢の中の世界がそうです。夢の中で、自分がすごく変なことをしているのに誰も笑ってくれないとか、そういう焦燥感みたいなものを感じることがあります。何かこの絵本の中には、常に非現実的な夢の中のような雰囲気がつきまとっているような気がします。

そしてここで、スニフが逃げてきて合流します。火山の後は、吹雪です。ここは、はじめてある意味で、全体的な統一のとれた見開きです。

これもやはり二つの部分に分かれている絵です。これはスナフキンです。それから、これはウィムジーです。おもしろいのは、ウィムジーはムーミンコミックスという新聞の連載された漫画にしか出てこないキャラクターです。このキャラクターとスヌスムリク（スナフキン）が洞窟の中であたたかくしている。こちらは、雪の中で助けを求めている。この一行は、この人たちに、食べ物と寝床を貸してもらって一晩を過ごす。という話なのですけれども、このスヌスムリクとウィムジーは、ある意味で行き倒れそうになったこの一行を助けてくれるヘルパーとして現れます。これが最初のヘルパーの一群なのです。

次に、最初のヘルパーから今度は別れて、手の形をした魔物に出会います。ヤンソンは、黒い手とか、得体の知れない黒いものというのが怖いという比喻をよく使います。ここは、もちろんスナフキンたちの洞窟ではなく、別なところなのですが、危険が押し寄せてくると、ここがもう滝になっています。この人たちはみんな泳げないので、滝がくると万事休すだというところで、気球が見えます。この気球に乗っているのが、トゥーティッキです。トゥーティッキは、『ムーミン谷の冬』の中で、ムーミンだけが目覚めて起きているときに、どうやって冬と仲良くするかという手ほどきをする人です。トゥーティッキもヘルパー的な存在です。ですから、スナフキンとウィムジー、それから第2弾のヘルパーとしてトゥ

ーティッキが現れる。そして、トゥーティッキの気球に乗ってムーミン谷に行きます。そしてここでわかることは、彼らはたぶん自力ではムーミン谷に行けない。トゥーティッキが現れなければ、おそらくグルグルしていただいだけ。地面を歩いたりするだけではムーミン谷にはもう行けないのです。ある意味気球という、ちょっと次元の異なる移動手段を使わなければ、もはやムーミン谷に行けない。しかも、その気球というのは、トゥーティッキが持っているということで、ムーミン谷はそこにあるのだけれども行けない。ここでようやくタイトル「近くて遠いムーミン谷」とはどういうことか、感じ取っていただけるかと思ひます。ムーミン谷がいつもそこにあるのだけれども、なかなか行けなくなっている。特別なチャンス、特別な運がなければ、もう行けない場所になっている、というような感じがちょっとします。

だんだんムーミン谷に近づいてきます。そうすると例の地図でお見せしましたように、こちらが海になっていて、こちらへんがたぶんハッピーフナットの島で、これが水浴び小屋です。そして、この辺が先ほどお見せしたようなおじいさんたちの別荘があった緑の野原です。この段になって最初の絵は、緑の草原でスサンナが座っている絵でしたが、ようやく緑が出てきます。つまり、これまでの絵はほとんど緑がないという特徴があります。多くが茶色や黒や赤や紫や青です。ちょっとナチュラルな色はあまり使われていない。ですから、ムーミン谷に入って初めて自然の緑が出てきます。

そして最後は、よくいろんなところで使われているので、ご存知かと思ひますけれども、ムーミン谷ではパーティーがあります。ちょっとおもしろいなあと思ひるのは、猫がなぜか先にムーミン谷に着いて寝ていて、ミルクをもらっているようなのです。パパが中心になって、ママはちょっと引いて、甲斐甲斐しく食事の準備をしている。それからムーミントロールがここにいますが、手に花束を持っています。普通男の子が手に花束を持っている場合は、その花束を誰かにあげるためなので、この花束はたぶんスサンナのために準備しているのだらうと思ひれます。スサンナもムーミントロールも、やや子どもからちょっと出てきて大人な感じになっているかなと思ひます。

III-iii メッセージ

不思議なことに、これで話は終わりません。というよりも、クライマックスがありません。最初にちょっとお見せしましたように、話がどういふふうになるかという、これで終わる。つまりパーティーが終わると、スサンナと猫は帰っていきます。つまり、今までだとムーミン谷にやってきたお客たちはそのまま居座ったり、またしばらくして、気が向いたらいなくなるということはありませんでしたが、その日のうちに帰るということはありませんでした。この帰っていく感じはちょっと寂しい感じもしますが、猫だけ尻尾がピンとしていて元気で、スサンナはどう思っているかわからない。悲しんでいるのか、ただ疲れているかわからない。ここでは、スサンナはうちに帰ったとありますが、どこのおうちに帰るのかなということ。母のいない家にはもう帰らないだらうと思ひさせるのですが、

ちょっと寂しい不思議な終わり方をしています。これをまとめて言いますと、ムーミン谷というのは今でも近いところにある。でも実は、そこに行くのはかなりもう難しくなっているというメッセージがこめられているかもしれません。それから大人になりかけた読者は、ムーミン谷に行ってもいいけれども、また帰ってきなさいねというメッセージも込められているような気がします。

先ほど気球に乗って、ムーミン谷へと連れて行ってくれた第2のヘルパー、これがトゥーティッキなのですが、この人は『ムーミン谷の冬』でムーミンを助けてくれます。キャラクターの中でヘルパー的な役割をする人の代表として出てきます。

それとは対比的なのがマイです。誰も助けないが、誰にも助けてもらわないと独立独歩のかたまりみたいな存在です。

もう一人のヘルパーとしてスナフキンが挙げられます。ムーミンを直接導くのは、前半ではスナフキン、後半ではトゥーティッキというふうにだいたいなってくるかと思います。スナフキンは特に前半ではムーミンを優しく、結構親切に導くというヘルパーの役割を果たします。

『ムーミン谷へのふしぎな旅』の絵本から少し翻訳してみたところがあります。1番最初に丸で囲まれた絵のところを直訳してみました。あまりいい訳ではないのですが、五つのグループからなっていて突然始まるのです。ヤンソンの物語はだいたい突然始まる。こういう前置きもなく突然始まるというのは、ヤンソンがはやらせたといっていると思います。それまではわりあい状況の説明がちゃんとあって、こういう状況でした、そこに何とかという人がいました、というようなソフトランディングで物語を始めるのが、北欧の児童文学の常套手段だったと言われています。いつも突然始まります。

——けさ、スサンナはとってもいやな気分、
ついつい、ネコになんくせをつける。

なにせ、ひどく老いぼれで、
おまけに、なまけもので、
食べ物にしか興味のない、
そういうたぐいのネコだったから。

草のうえにすわって、いい気分、
なのに、スサンナはいいはなつ、
この緑、ぜんぜん気に入くない。——

最初に緑がありました。ムーミン谷が近づいてきた時にまた緑が現れますけれども、それまでの間、緑がほとんど出てこないと言いました。

この緑、気に入らないとスサンナの言葉で、スサンナの願望が実現するわけです。スサンナたちが逃げ惑っている間、緑は出てきません。というようなことなのだろうと思います。

——みえるままに、みえるだけのものなんて、
どれもこれも、つまらない。
きのうも、きょうも、あしたも、
いつも、いつも、おんなじだなんて。——

いつも同じ日常なんてつまらない。見えるままに見えるだけ、緑の野原が緑にしか見えな
いというのはつまらないと言っているわけです。

——わたし、からからと笑いとばしてやる、
いちばん危険なものがやってきて、
すべてが、いまより退屈じゃなくなって、
まったく逆のものになったときにはね。——

これが願掛けです。いつもと違うもの、むしろ逆のものが出てきたら私喜んでしまう、
というおとぎ話によくある願掛けの話で始まっています。その願掛けは危険なことに必ず
成就するので、次のような旅が始まる。だから危険というのは、今まで退屈だと思っていた
ことが変わってしまう。それが変わってしまうことによって、前の自分には戻れない、
前の家には戻れない。前の家はもう空っぽなのだからという意味で、自分の退路を断つと
いうか、自分の足元を切り崩すような危険な旅でもあるんじゃないかなと思いました。
今までムーミンの物語では、我が家というのは、あきらかにムーミン屋敷、ムーミンの家
族を中心とするあの世界だったのですが、スサンナはもうそこには帰っていかない。自分
の家に帰るという言葉で表されているように、もうムーミンの家には帰らないというこ
とが言えます。それから、このスサンナはいつも走ったり逃げたりしている。最初に申し上
げましたように、スサンナはムーミン谷を目指して旅に出たわけではないのです。今のい
やな現状から逃げたい、今の自分はいやだという、ある意味ではネガティブな理由から出
ていて、どこかを目指しているわけではないのだけれども、何かの弾みでムーミン谷に行
ってしまったという感じです。

最後にヤンソンの引用で締めくくります。『誠実な詐欺師』という小説がありますが、そ
の小説の文庫版が出ました。最近出たので、ちょっとご紹介します。これは1982年に書か
れた作品で、すでに日本で出した単行本を文庫化したものです。2006年の7月10日に
出版されたばかりなのですが、その文庫本のあとがきにヤンソンの言葉を引用していますの
で、読みます。これは、1962年に雑誌でインタビューされたときの受け答えなのですけれ

ども、自分が生んだムーミン谷の世界、あるいはそこの住人たちを、ヤンソンは子ども時代の記憶へとわずかに開かれた扉の隙間に例えています。完全に閉じられていないけれども、でもほんの少ししか開かれていない扉に。

——私の記憶はどうしようもなく頼りなくて、日付やできごとはするすると抜けおちて、何年もあったはずの子ども時代は、ただひとつの長い夏として思いだされてしまいます。けれどもわたしは、子ども時代というあの特別な世界からたちのぼる匂いや、色あいや、口ぶりや、気分を、あの隙間のおかげで呼びもどすことができるのです。——

ということで、この隙間は、限りなく細くなっていて、もしかしたら閉じられているときもあるかもしれない、という気はします。以上で私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

*引用された作品には（ ）で刊行年を付した。